倉本聰コレクション9

文五捕物絵図

(1)

倉本聰

scénario
1967

文五捕物絵図

……(1)

理論社

キャスト

滝川竜太（バク）　石原裕次郎
黒岩頼介（クロ）　渡　哲也
黒岩恵子　仁科明子
三浦直子　篠　ヒロコ
深町行男　佐藤　慶
一色光彦　玉川伊佐男
加賀見乙吉　中条静夫
丸山米三（マル）　高品　格
高木吾一　草薙幸二郎
大内　正　小野武彦
平原春夫　粟津　號
清水英子　新井春美
日高　明　寺尾　聰
由比　北浦昭義

スタッフ

九条浩次　神田正輝
松川　宍戸錠
大久保　平泉　征
南　武藤章生
木内　柳生　博
吉野　浜田　晃
新井　山根久幸

制作　石野憲助
森川一雄
山口剛
村川透
他

編集　小宮山量平
後藤洋一

KURAMOTO SOH COLLECTION 19

大都会

1984年6月　第1刷

著　者／倉本聰（くらもとそう）©
発　行／山村光司
発行所／株式会社理論社
東京都新宿区若松町15-6
電話 (03)203-5791
振替 東京9-95736
1984 Printed in Japan／0393-91619-8924
加藤文明社印刷／島田製本

倉本聰作品

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

文五捕物絵図(1)

NHK制作
昭和42年4月21日～12月22日放送

文五捕物絵図（1）　もくじ

越後こぼれ花　7
鴉　39
武州糸くり唄　74
相州送り舟　110

菊坂町路地裏　141
甲州屋お力　177
若狭宮津浜　213
初恋　247
「文五」の頃　282

装画・題字　小野州一
装幀　杉浦範茂

越後こぼれ花

江戸切絵図

語「都会は田舎者の夢を誘う。今も昔もそれは変らない」
しのびこむ賑やかな江戸の喧騒。

江戸の絵巻（そのモンタージュ）

語「江戸には何がある？
行ってみなくちゃそれはわからない。けんらんたる絵巻か、華やかな暮らしか。そんなもン実際にあるわけがない。だが地方人はそれに憧れる。憧れて江戸へ出、夢を満たそうとする。夢は真実彼らを満たしたか？」

「樽屋」二階

朝。矢七と与之助の部屋。
小間物屋の道具と汚い小物。

語「ここにいるのもそんな二人だ」
カメラ移動して、まだ床の中にいる矢七と与之助を写し出す。
与之助奇声を発す。
与之助「江戸の女を？」
矢七「そうよ。きっとおいらは江戸の女をかみさんにする」
与之助「かみさんか！　かみさん――いらねえ」
矢七「おまいはそんなこと考えなかったか？」
与之助「俺か？」
矢七「うむ。くにいる時」
与之助ウットリと夢想している。
与之助「――考えはしたなあ。だけどやっぱり」
矢七「何だ」
与之助「江戸の女は俺ンとこにゃ来ねえな」
矢七「そんな弱気でどうするンだいったい！　俺は必ずしとめてみせる。あっというような江戸のべっぴんを一発でしとめる」
与之助「一発？　しとめる、しとめるって、いったいどうやってお前――」

その時下から文五の声。
文五「(遠くから) 与之さん！　起きてるかえ！」
与之助「へいッ。――兄ィだ」
文五「(遠くから) 風呂へ行かねえか！　亀の湯の朝湯へ！」
与之助「へッ (苦い顔。モゾモゾ起きる)」
矢七「へいへいッ。ただいま！」
　矢七はね起き、着物をつけながらフト与之助を見る。
矢七「おい起きないのか」
与之助「亀の湯はおいら苦手だよ矢七」
矢七「――――」
与之助「どうして江戸っ子はああ熱い湯に、ムリして入らなけりゃ気がすまねえンだ！」
　矢七枕頭に坐る。
矢七「(あらたまる) 与之さん。あんたそんなふうに弱いことといってるから、いつまでたっても江戸っ子になめられる！　熱い湯くらい何です。あんなもの！」
文五「(遠くから) 与之さん！」
矢七「へーい！　今行きやすッ――与之さん、行こうッ」
　矢七ふとんをはぐ、小さくなってる与之助、はね起きて、
与之助「畜生、一発起きてやるか――」

「樽屋」

　ドッと笑い合う文五、幸吉、おしの、お京。
文五「そうかねえ、そんなにあの湯は熱いかねえ」
幸吉「そりゃそうだ文さん、おいらも年じゅう目をつぶって入ってる」
おしの「やせがまんかえ」
お京「馬鹿な人たち！」
　ドッと笑う。
「おはよう！」
　とび込んでくるおけいともう一人の女。
おけい「あら、兄さん」
文五「何だ。早えな」
おけい「権現様にお札をとりに行くの」
文五「信心かえ」
おけい「たまにはね。お京ちゃん、まだ？」
お京「(奥で) ちょっと待ってえ」
おけい「あ、兄さん、この人ひき合わせるわ。今度お父っつぁんの裏に越してきたおゆきちゃん。兄さんと二人で越後から出てきたの。よろしくね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

文五「そいつぁー」
おゆき「おゆきです。よろしく」
文五、おゆきを見て、フト妙な顔。
その視線におゆき文五を見る。
一瞬ハッとしたように顔を伏せる。
文五「はてね」
おゆき「――」
文五「どっかで会ったことがあるかな」
おゆき「(こわばった笑いをつくって)さあ――」
文五「――」
おゆき「おけいちゃん、私、表で待ってます」
おけい「すぐ行くわ!」
おゆき表へ。
二階からドタドタッと下りてくる与之助、矢七。
矢七「お待たせお待たせ!」
与之助「フウ眠い! こういう時ぁ、ピリッと熱い湯に入らにゃ。兄ィ、亀の湯の湯はぬるくていけねえねえ!」
一同(与之助を見る)
プッと吹き出す一同。
与之助「え、何か? え、あっしの顔に何か――」
幸吉「(笑いつつ)さ、急いだ急いだ、ぬるい湯に入ろう!」
文五笑いつつ、のれんをあけて表を見る。

「樽屋」の外

通りのかなたにポツンと立っておけいを待っているおゆきの姿。白く、可憐なその横顔。
タイトル流れて。

「樽屋」

朝めしをガツガツ食っている矢七と与之助。
みそ汁とたくあん。
矢七「後家さん?」
与之助「うん。ホラよ、江戸屋の土蔵の窓から見下ろせる」
矢七「ああ、お武家の後家さん。いつか大奥お女中殺しン時の」
与之助「それよ!」
矢七「覚えてるよおいら。きれいな奥さんだ」
与之助「ゆみさんておっしゃる」
矢七「ゆみさんておっしゃるのか」
与之助「その方がな、近頃頼まれれば代書をなさるンだ」

矢七「代書をね」
与之助「うむ。お代わり！」
矢七「お。――自分でつげよ！」
与之助「（飯をよそいながら）おいらくにの婆ちゃんにあてて、便りを書いてもらおうと思うンだ」
矢七「おまえが？」
与之助「うン」
矢七「あの方に？」
与之助「うん」
矢七「オオおいらも行く！」
与之助「おめえもくにに便りを書いてもらうのか」
矢七「いや、便りはおまいので間に合わせる」
与之助「何を!?」
矢七「おいらあの奥さん、かねがね憎からず思っていた」
与之助「――!!」
矢七「年増の色気っていうのかなぁああいうのを。かなり良いと思う。いけると思う、一緒に行く」
与之助「――」
矢七「お代わり」
与之助「勝手につぎゃがれ！」
矢七（飯をよそる）
与之助「（まじまじと矢七を見て）おい、身のほどを考えろよ、相手ぁお武家の元奥様だぞ」
矢七「しかしご主人はなくなっている。淋しいにちがいない。いや淋しいにきまってる。おいら当たってみる（もぐもぐと食べる）」
与之助（あきれ果てて見ている）
矢七「田舎者の取柄は恥知らずなところだ。江戸っ子に張合うにゃあそれしか手はねえ。要はここだ、ここ、（胸をたたいて）そして後はこの一手（手で押すまねする）」
もりもりと食う矢七。
与之助あきれ果て。
与之助「北と南じゃこうもちがうかねえ」

湯島

八重の桜が咲き誇っている。

文五郎の家

将棋をさしている文五郎と文五。
そばに丑吉。
文五郎「八丁堀の目明しがね」

文五「へ？」
文五郎「昨日この家にたずねてきやがったよ」
丑吉「何だってンで」
文五郎「それが――（ピシリと打つ）おけいのことだってンだ」
文五「おけいの!?」
丑吉「おけい坊がどうかしたンで！」
文五郎「どうしたもこうしたもあったもンけえ。
　おけいは今じゃもうおいらの娘だわ」
丑吉「へえ――」
文五「――また何か、あいつの前身のことで（打つ）」
文五郎「うむ。――三社祭から蓑市にかけて、浅草界隈ですりが出たらしい。前者を洗っているンだっていやがる！」
丑吉「そんな！　おけい坊はもう四年も前に！」
文五郎「だからおいらぁ、タンカ切ってやったわ、あいつの親爺ぁそりゃ名うてのすりだった。
（打つ）角取りだよ、文さん。
――あいつもガキの頃ぁ仕込まれて稼いだ。だがおいらが引取ってスッパリ洗わせた。
このおいらがだぜ」
丑吉「へえ」
文五郎「〝おぬし、おいらを疑るかえ〟ってな」
丑吉「どうしました」
文五郎「しっぽを巻いて逃げていきやがったわ」
文五（打つ）
文五郎「目明しってものは心せにゃいけねえ。
　なあ文さん」
文五「へえ」
文五郎「心をあらためて堅気ンなったもンが、いつまでも昔をほじくられちゃあ、よくなる者まで悪くなっちまう。おぬしらも気をおつけ」
文五「へい」
丑吉「まったくで」
　裏でおけいの明るい声。
おけい「（遠くで）じゃおゆきちゃん後で行くわね」
おゆき「（遠くで）待ってる」
おけい「（遠くで）あ、そいから――」
　文五郎、パチリと打つ。
文五「（ポツリ）父っつぁん」
文五郎「ん？」
文五「裏に娘が越してきやしたね」

文五郎「娘？　――ああ、おけいがひどく親しくしている」
文五「――」
文五郎「どうかしたかえ」
文五「いや」
文五郎「（初めて盤から顔を上げる）惚れたかえ」
文五「いや」
　文五郎、丑吉低く笑う。
文五郎「（パチリと駒を打ち）王手飛車取りだ。どうする、文さん」
　のどかな晩春の午後。樹々が美しい。障子にあたる釣燈籠の影。
　音楽――「おゆきのテーマ」（たとえば、古い越後俚謡などを、澄んだ単楽器であしらいたい）

路地裏

　井戸端で髪をすくおゆき。
　帰途についた文五と丑吉、おゆきと目が合う。頭を下げる文五、髪をすきつつ挨拶を返すおゆき。
　文五ら通りすぎ、ゆっくり歩く。
文五「（低く）どうだえ、丑吉」
丑吉「（低く）見たねえ、どっかで」

ゆみの家

　ゆみ代書をする。
　そばでかしこまって坐っている与之助。矢七。遊んでいる兼太。
ゆみ「それから？」
与之助「オオ、オバッチャン、おばあちゃま」
矢七「（つつく）御祖母上、御祖母上！」
与之助「えい、めんどうくさい、ばあちゃんも変りはナナないか」
矢七「候！」
与之助「候!?」
矢七「（うなずく）候」
与之助「変りはないか候――？　――」
矢七「？　？」
ゆみ「無きものと存じおり候」
二人（ホッとうなずく）
与之助「ばあぁちゃん――」
　ゆみ書く。
　表で「ごめん」と人の問う声。
兼太「おじちゃんだ！」

ゆみ「こちらへ入っていただきなさい」
兼太とんでいく。
ゆみ「それから？」
与之助「ばあちゃん私の同宿人は矢七と申し」
矢七「へへエ――あっしですよ」
ゆみ書く。
与之助「いとむさくるしき男にて候」
矢七「なにっ!!」
男の声「失礼いたします。先日の書物をお返しに――」
入ってきたのは草太郎。与之助と矢七、目をまるくして草太郎を指す。
与之助「ア、ア、ア、ア」
矢七「先生！　――あ、あんたも!!」
草太郎「――！（ゆみをみて）ごめんください。先日は失礼致しました」
ゆみ挨拶して立つ。
ゆみ「いいえ、何のおかまいもいたしませんで――」
与之助「――ばあちゃん（ひとり言）――」
与之助、矢七、ぼう然。

道

ぐんぐん歩く与之助、矢七。
与之助「ずるいや先生！」
矢七「だから江戸っ子は早えっていったろ！」
与之助「先生、奥さんに惚れてるのかねえ」
矢七「決まってらあな、ああいうのをよ、くにじゃむっつり助平っていうぜ」
与之助「たまげたなあ！　だけど矢七こりゃ見通しは、暗いぞ」
与之助ぐんぐん行く。
矢七「どこへ行くンだよッ、飛脚問屋はここだぜッ与之さん！」

山田屋（飛脚問屋）
ここは活気に溢れている。
出入りする人々、飛脚たち。
おかみ「はい、ご苦労さんッ」
丁稚「大阪天満屋さんから荷ィ着きましたッ」
おかみイライラと働いている。
番頭「おかみさんッ、おかみさんッ、天満屋さんの荷ッ」
おかみ「ご苦労さんッ」
番頭「ハイ飛脚さんッ、後はいたします奥へどうぞッ」

番頭「奥で休んでくださいッ、はいご苦労さんッ」
圧倒するような喧騒と活気の中へ、気押されたように入っていく二人。
番頭「はいッ、又さん店先は邪魔だよッ、奥で休んで！
奥へ行って！」
到着したばかりの三度飛脚又五郎、足をはたいて奥の溜りへ。

飛脚溜り

又五郎入ってくる。
酒を飲んでいる明けの飛脚たち。
男1「おうッ、今着いたかえ」
又五郎「へ」
男2「さ、酒がある、飲みねえ飲みねえ」
茶碗に酒をつがれる又五郎。
又五郎「ごっつおさんで」
男1「東海道はどうだえ」
男2「大井川は渡れるけ」
又五郎「へ」
どやどやっと入ってくる荷運びの飛脚たち。
男1「おう来た来たッ」
男3「やってるなッ」
男2「さあ待ってたンだ」
男4「茶碗はあるかえ」
男3「昨日は寝ずでよ。箱根の山越えよ」
男2「ま、やれやれ！　やってくれろ！」
男4「話ぁ後だわ！」
たちまち騒がしくなる人々の中から、目だたぬようにそっと抜ける又五郎。

道

又五郎、急ぐ。

湯島路地裏

又五郎、急ぎ足で帰ってくる。
文五郎の家から出てくるおけい。
おけい「(パッと明るく)あら、今日着いたンですか？」
又五郎「(うれし気に)へ。あ、これ」
土産の包みを出す。
おけい「まあ！　小田原の！　こないだも！　すみません！」
又五郎「いえ。こっちこそ留守の間妹が――」
おけい「お父っつぁん！　お父っつぁん！　――大好物な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com